出題の意図および解答例

Ⅰ　次の文章は、ある作家の談話筆記である。これを読んで、後の設問に答えなさい。なお、出題のために、原文の一部に傍線を追記しています。

（配点・50点）

【出題の意図】

受験生が、明治の文学を考える上で重要な項目である言文一致について理解しているかどうかを問う。

問一　この談話を語っている作家について知るところを述べなさい。（10点）

【解答例】　作家は二葉亭四迷である。東京外国語学校にてロシア語を学び、ツルゲーネフをはじめとするロシア文学の翻訳に携わった。また坪内逍遙に師事して言文一致小説の嚆矢とされる『浮雲』を発表したが、未完で終わっている。『浮雲』は、役所を免職となった主人公内海文三の内面を描いた近代的な小説であると言える。また『小説神髄』における逍遙の素朴なリアリズムを越えた小説論「小説総論」を発表している。

問二　傍線部（A）「坪内先生」は当時『小説神髄』で自身の小説観を披瀝していました。どのような小説観か、知るところを述べなさい。（10点）

【解答例】　『小説神髄』において逍遙は、儒教の影響を受けた江戸戯作の勧善懲悪的な内容を否定し、小説を芸術の一分野と位置づけ、人情世態を写実的な方法で描き出した小説を、近代のあるべきものと位置づけている。

問三　傍線部（B）「円朝の落語」とはどのようなものですか。説明しなさい。（10点）

【解答例】　具体的には、当時人気を博した三遊亭円朝の人情噺「怪談牡丹灯籠」を指す。田鎖綱紀の速記法を学んだ若林玵蔵が高座に通って速記し、出版されたことで、多くの読者を獲得した。江戸を舞台とし、幽霊譚と仇討ちの話が交錯した、勧善懲悪的な要素も強い作品。

問四　傍線部（C）「坪内先生は敬語のない方がいいと云うお説である」とありますが、敬語の有無で小説の語りにどのような違いが出て来るか、考

えを述べなさい。（10点）

【解答例】待遇表現である敬語があると、語り手の存在感がより際立つ。敬語が無いことで、小説の語り手はより透明なものとなり、語りをあまり読者に感じさせず、登場人物自身が語ったり考えたりしているかのように、読者に受け取らせる効果があると考えられる。

問五　傍線部（D）「坪内先生は少し美文素を取り込めといわれた」とありますが、ここでの「美文」とはどのようなものだと考えられるか、考えを述べなさい。（10点）

【解答例】伝統的な和文や漢文を基にして、華美な語句や修辞法を凝らした雅でリズミカルな文章。特に言文一致体のような口語文体とは対極にある擬古文のこと。

II　次の文章は、川端康成の小説「片腕」の一部である。文章を読み、後の設問に答えなさい。なお、出題のために、原文の一部に傍線を追記しています。（配点・50点）

【出題の意図】

日本近代文学の代表的な作家の作品について、基本的な知識を有していることを確認し、作品を丁寧に読み取り、自分の考えを根拠を示して展開できる力を問う。

問一　傍線部「魔の発作の殺人のようだった」と「私」が語っているのはなぜか。説明しなさい。（15点）

【解答例】　「私」の右腕と「娘の腕」をつけかえることで「私」は安心した眠りにつくことができ、孤独を癒せたように感じたが、ふと自分の右腕が目についたことにより、自分の孤独を実体をもった存在として強烈に感じ、「私」は「娘」という他者の片腕をとっさに投げ捨てるという暴力的な行為に至ったから。さらに、もぎ取られた「娘の片腕」は「私」の欲望と暴力の犠牲となり、死にゆくいたいけな犠牲者である「愛児」として「私」に認識されているから。

問二　この小説にみられる視覚や触覚など感覚表現の描写について、その特徴を説明しなさい。（15点）

【解答例】　「私」をとりまく空間は、「もや」に包まれた視界のはっきりしない状態であるが、そのなかで「淡い紫」「薄みどり」「白い花びら」「朱色の服の若い女の車」などの色彩が点描され、視覚的に幻想的空間が演出されることで、「私」が孤独な部屋のなかで「あたたかく甘い眠り」にあることが豊かなイメージで描かれている。また、娘の腕や肉体のなめらかさや円み、爪先が手のひらを掻くさまを敏感にとらえる「私」の触覚は、娘の若さと純潔さから安らかさを得ようとする意識のあらわれでもある。全体的に「私」の語る世界はあいまいな像であることと対照的に、色をとらえる視覚や娘の身体に対する触覚などの感覚が鋭敏である。

問三　「私」と「娘」や「娘の腕」との関係性はどのようなものか、あなたの考えを述べなさい。（15点）

【解答例】　「私」は孤独な独身者であり、その孤独感と虚無感を癒すために、純潔な「娘」やその分身である「娘の腕」を求めている。「娘」の体から離れ、自我を持ち会話をする「娘の腕」は、「私」の孤独が見出した幻想的存在である。「私」の孤独を救済するために、「娘」と「娘の腕」による自己犠牲的な献身で「私」は一体化をはかろうとするが、自分をはなれた自分の腕のみにくさを認識するに至り、「私」と「娘の腕」の一体化は失敗し、より一層「私」は絶対的な孤独に向き合うこととなる。「私」は「私のような男の汚濁の血」が「清純な女の血」によって癒されることを願い、「娘」は「私」の願望に応えるために「娘の腕」を切り離す。「娘」は「私」を救済する存在であるとともに、「私」のために犠牲を受け入れることを求められる存在でもある。

問四　川端康成の作品を次から一つ選びなさい。（5点）

【解答】　イ

Ⅲ　次の（1）～（5）の言葉について、知るところを論述しなさい。（配点・各20点）

【出題の意図】

日本近現代文学史の知識を問う。

（1）仮名垣魯文

【解答例】　江戸末期から明治初期にかけて活躍した戯作者、ジャーナリストで、『西洋道中膝栗毛』や『安愚楽鍋』など伝統的な形式に明治の新しい風俗を盛り込んだ作風で人気を博した。国民教化政策の一環として「三条の教則」が出されると、戯作から実用的な作風へと移り、『仮名読新聞』を設立、ジャーナリストとしても活躍した。高橋阿伝の事件が起こると、「つづきもの」と呼ばれる連載記事を執筆、『高橋阿伝夜刃譚』として刊行するなど、戯作者としての本領を発揮した。

（2）意識の流れ

【解答例】　作中人物の心理の動きをそのまま表現しようとする手法で、心理学者のウィリアム・ジェームズが、人間の意識を、絶えず移り変わり切れ目なく流れるものと位置づけたことを受け、内的独白の新しいスタイルとして二〇世紀の前半にさまざまな試みがなされた。脈絡を欠いた断片的な表現の連なりは、人間の意識の動きを捉えた新しいリアリズムとして評価され、西欧ではジョイス、プルーストらがこの手法の担い手となり、日本でも伊藤整や川端康成らがこの手法を小説に用いている。

（3）江藤淳『成熟と喪失』（一九七八年）

【解答例】　母と子の密着を切り離し子の自立を促す父性原理が弱く、子をどこまでも庇護しようとする母性原理が強い日本社会において、子の自立は家庭における母の役割放棄もたらされると論じた。また、そのような母の崩壊を高度経済成長下における自然破壊と関連づけ、安岡章太郎『海辺の光景』や小島信夫『抱擁家族』などの小説によって指摘した。

（4）安部公房

【解答例】　実存主義的な作風やシュルレアリスム的なスタイルを取り入れ、戦後を代表する作家として、小説だけでなく、演劇や映画など幅広く表

現活動を展開した。思想的にはマルクス主義にも接近した。芥川賞受賞作となった「壁――S・カルマ氏の犯罪」（一九五一年）や「赤い繭」（一九五〇年）、「デンドロカカリヤ」（一九四九年）など、安部作品の主要なモチーフには〈変身〉がある。『砂の女』（一九六二年）は世界的に高い評価を獲得している。そのほか、『他人の顔』（一九六四年）、『燃えつきた地図』（一九六七年）など。

（5）村上春樹における〈コミットメント〉と〈デタッチメント〉

【解答例】　『風の歌を聴け』（一九七九年）や『羊をめぐる冒険』（一九八二年）などの初期作品に顕著にみられるような社会や他者から距離をとる姿勢を〈デタッチメント〉と呼ぶ。一九八〇年代以降の高度消費社会を背景に、他者や社会的問題などに積極的に関わらないような主人公が登場する作品を描いた。しかし、一九九五年の阪神・淡路大震災と地下鉄サリン事件をきっかけに、社会的事象や問題に関わること―〈コミットメント〉を強く意識した作品へと、その作家的態度は大きく変化した。代表的な作品には、震災を題材にした連作短編集『神の子どもたちはみな踊る』（二〇〇二年）、地下鉄サリン事件のノンフィクション『アンダーグラウンド』（一九九七年）がある。そのほか『ねじまき鳥クロニクル』（一九九五年）、『１Ｑ８４』（二〇一〇年）などの作品や、二〇〇九年のエルサレム賞受賞スピーチ「壁と卵」などもあげられる。